

準備委員会企画シンポジウム 1

心理危機研究をどのように現場実践に生かすか

—研究の場と臨床現場の往還—

【企画趣旨】

いじめやハラスメント、事件および事故、自然災害や犯罪被害、もしくは自死による喪失体験などの心理的危機は、周囲を含めた家族や職場の関係者までを含めれば、全ての人が否応なしに巻き込まれていることは、疑いがない。自身の関係者に大きな心理危機が発生した場合には、同時に自身にも大きな衝撃をもたらし、危機的な状態に陥ることもある。これらの点で、全ての現代人は心理的危機から無関係ではいられない。

臨床現場と研究との間で望まれる関係のあり方とはどのようなものなのかについては、これまでにも科学者実践者モデル (Scientist practitioner model) などによって、古くから盛んに議論されてきた。一方、今日におけるグローバル化の急速な進展や日本社会が急激に複雑多様化していく中で、国民全体に漠然とした不安が、以前にも増して広まりつつある。このような情勢の中で、心理学という学問が、現場の社会的問題に対して具体的にどのような貢献ができるのかを、現在ほど問われている時代はないと言えよう。

本シンポジウムでは、若手の研究者が取り組んでいる臨床現場での心理的危機について、具体的な研究成果を提示してもらった上で、それらをどのようにして実践へつなげていくかという点に焦点を当てて議論を行う。その上で、心理学における研究と臨床現場との望ましい関連のあり方とは何か、改めて検討を加えることを試みる。研究の成果を、臨床の現場にどう活かしていくのか、また、現場の問題をどのように研究の土台に乗せていくのかという問題について、ここで今一度検討を加えておくことは、今後ますます複雑多様化する社会において、重要な意義を持つものと思われる。今こそ、心理学が社会に対してどのような貢献ができるのか、自らの足元を見つめ直しておくことが求められている。